Series

もうひとつの都市（まち）の中へ

松本コウシ

Visions of a still night

「続・眠らない風景」より

Photo & essay Koshi Matsumoto

風景に宿る過去の美学

空にポッカリと浮かんだ巨大なドーナツ。その真ん中にロケットが突き刺さったような建物がたくさん立ち並び、それらの合間を縫うように曲がりくねった透明チューブが突き進む。チューブの中には丸っこいデザインのエアーカーなる自動車が光の如く駆け抜ける。かつて、少年漫画に描かれていた未来都市とはこんな感じでした。いまだ決して実現されることのないあの「未来」は、いったい何処に行ってしまったのでしょう。1970年、国民のすべてが「文明」に夢と希望を抱き開催された大阪万博。今まで見たこともない不思議な建物が立ち並ぶ会場の光景は、建築オリンピックの異名の通り、まさに「未来」を予感させてくれたのでした。大阪万博で掲げられたテーマは「人類の進歩と調和」。しかし万博が生み出した未来展望的なナショナリズム=夢物語は、いつの間にか何処かに消え失せ、代わって大量消費型社会が突然出現したのでした。人類はいったい何に向かって進歩しようとしたのでしょう。

文明は、文化を破壊するともいわれています。文化とは人、つまり人間が長年にわたって培ってきた慣習や感情などの具象化と考えると、文明の進化が利便性と合理性=科学を追求するあまり、人は本来の心や魂を忘れてしまったということなのでしょうか。
不便であるからゆえに人は何かを工夫し、その結果として文化や芸術を生みだすのかもしれません。21世紀という未来の象徴を目指した大阪万博会場の超モダン的都市風景は、皮肉にも35年後の現代では決して実現できない、まさに卓越した「文化」的デザインの建物ばかりであったと言えます。

今宵出会った風景たち、それらは大阪万博と同じ高度成長期に生まれ、今では昭和の残影的な存在となってしまった文化住宅たち。自然化されながらひっそりとたたずむ「木造モルタル二階建て」というかつての「文化」が、現代の合理化されただけの都市風景より美学を保って見えるのは、不便だった時代の魂がいまだに宿っているからなのかもしれません。

Profile
松本コウシ Koshi Matsumoto
1961年広島生まれ。
大阪芸術大学写真学科卒業後、大阪宣伝研究所を経てフリーランス。
夜の街を彷徨して撮影した写真集「眠らない風景」他、「京阪沿線」「ウイークエンド」「記憶への旅」「肖像権」などの著作がある。
日本写真家協会・日本写真協会会員。